

第2回八ッ場ダムモニタリング委員会

議事概要

「第2回八ッ場ダムモニタリング委員会」において、八ッ場ダムに関するモニタリング調査結果、モニタリング調査計画等の審議を行った。

主な審議結果は、以下のとおりである。

- 令和2年のダム下流地点での散発的なBOD上昇の要因について検討すること。
- 貯水池内での水質自動監視データ等、一定の情報が蓄積されつつあることから、令和元年出水後の濁度の変化や、令和2年夏期のECの急激な変動等にも着目し、貯水池内の水質挙動を分析すること。
- pHと溶解性無機態リンの存在比率の関係に関する実験結果について、植物プランクトンが使えるリンが既往の予測検討時と比較し多くなっているが、顕著な富栄養化現象が確認されていないことから、その原因についても検討すること。
- 両生類・爬虫類・哺乳類調査について、コウモリ類を確認するための調査が不足していることが残念である。次年度も両生類・爬虫類・哺乳類調査が6月～7月等に実施されるので、この調査時において、コウモリ類の確認に努めてほしい。
- ホタル類の保全について、現時点で環境保全対策の効果が発揮されていることは評価できる。引き続き、地元の協力等を継続的にお願いしていくこと。
- アサマジミについて、当該地区に限らず広く周辺地域も含め、近年は確認されていないことから、絶滅したのではないかとの話もある。このため、アサマジミの成虫及び幼虫を確認することは今後も難しいと考える。
- オオムラサキの幼虫が確認されたことは大変喜ばしいが、その幼虫が羽化することが重要である。今後も、幼虫の生息を定期的に確認したほうが良い。また、幼虫の生息地の周りに囲いをして落葉の飛散を防ぐことも有効である。さらに、特定外来生物のアカボシゴマダラについては、今後の動向に注意が必要である。
- ハリエンジュ等の外来種の繁茂について、今となってはダム事業の影響かどうかは不明であるものの、ダム周辺から下流域にかけて分布を拡大していることから、今後は、吾妻川流域全体を巻き込んだ対応が必要である。
- 貯水池内に堆積している土砂について、堆積している場所で土砂の粒径が異なる可能性があることから、粒度分布の調査を実施したほうが良い。
- 八ッ場ダムの環境保全に関する取り組みは、海外でも注目されているため、本調査の結果を論文等で情報発信していくとともに、今後、八ッ場ダムが研究フィールドや環境学習の場として活用されることが望ましい。

以上